

山梨県立文学館 館報

1989(平成元)年
11月 創刊

第103号



津島さんと御坂峠へ 中沢けい 2
 企画展「津島佑子展 いのちの声を
 さかのぼる」展示資料より 3
 追悼 渡邊弘先生・閲覧室より 4

教育普及事業より・
 館からのご案内・寄贈資料より
 資料翻刻 松村英一 鈴木隆宛書簡 5
 館の日記・利用のご案内 6・7
 8

特設展 「津島佑子展」

いのちの声をさかのぼる」開催

平成二十九年九月二十三日(土・祝)～十一月二十三日(木・祝)

二〇一六年二月十八日に逝去した作家・津島佑子の初の展覧会。

津島佑子(本名・里子)は、津島修治(筆名・太宰治)と、都留高等女学校の教員だった美知子の次女として、一九四七(昭和二十二年)年に生まれた。白百合女子大学在学中より小説を発表。結婚、出産、離婚、息子の死、母子家庭や障害を持ち夭折した兄のことなど、自身の体験をもとに女性の立場から内面世界に迫る作品を創出し、『葎の母』(一九七五年)、『光の領分』(一九七九年)、『黙市』(一九八四年)、『夜の光に追われて』(一九八六年)などを刊行した。



津島 佑子
台北紀州庵文学森林にて
2013年2月24日 撮影 陣方發

代表作の一つ「火の山―山猿記」は、母・美知子の実家である石原家をモデルに甲州を舞台とした長編小説で、三代にわたる一族の人々と時代を壮大なスケールで描き出し、一九九八年に谷崎潤一郎賞、野間文芸賞を受賞。

その後も、戦後の混乱期を旅する少年少女と戦争孤児を幻想的に描いた『笑いオオカミ』(二〇〇〇年)、東日本大震災、福島原発事故を受け、終戦前後に生まれた混血孤児の半世紀を描く『ヤマネコ・ドーム』(二〇一三年)、十七世紀にアイヌの母と和人の間に生まれ、キリシタン一行と海を渡った女性を描く遺作『ジャッカ・ドフニ―海の記憶の物語』(二〇一六年)など、少数民族や差別、原発問題へと視野を広げ、重厚な作品世界を展開していった。

本展では、津島佑子の生涯をたどり、「火の山―山猿記」を中心に作品世界を紹介する。編集委員は坂上弘(作家・日本近代文学館理事長)、堀江敏幸(作家・早稲田大学教授)。

■関連イベント

- 朗読と対談
「火の山―山猿記」の世界
11月12日(日)午後1時30分～3時
朗読 竹下景子(俳優)
対談 川村湊(文芸評論家)
石原燃(劇作家・津島佑子長女)
会場 講堂 定員500名
 - 講演会
いずれも午後1時30分～3時
会場 研修室 定員150名
 - ・「津島文学の魅力」
10月14日(土)
講師 坂上弘
 - ・「ふたつの世界が接するところ」
11月5日(日)
講師 堀江敏幸
 - 講座
10月1日(日)午後1時30分～2時40分
「津島佑子作品の場所をめぐる」
講師 中野和子(当館学芸員)
会場 研修室 定員150名
- ※朗読と対談、講演会、講座は、参加無料。お電話、ホームページ、当館受付にてお申し込みください。定員になり次第締め切らせていただきます。
- 閲覧室資料紹介
「津島佑子の世界」

9月22日(金)～11月23日(木・祝)
場所 閲覧室 入場無料
「火の山―山猿記」などの著作、母・美知子とその実家・石原家、父・修治(太宰治)などの関連資料を紹介。

■辻村深月講演会

夏の特設展「作家のデビュー展」の関連事業として、山梨県出身の小説家・辻村深月氏の講演会が当館の三枝館長を聞き手として開催された。「フィクションの向こう側」と題し、氏のデビュー作『冷たい校舎の時は止まる』を中心に、人物造形やストーリーの組み立てなど創作の方法に関することや、デビュー時のエピソードなどが語られ、聴衆を魅了した。



当館講堂にて 2017年7月30日

津島さんと御坂峠へ

中沢い

道で、カーブを曲がると甲府盆地が眼下

に開ける。果樹園が並ぶ道でもある。「こ

この桃はほんとに美味しいのよ」と、子

どもを産んだ時に津島さんのお母さんが

持つてきてくれた桃の話になった。津島

さんのお嬢さんが生まれた時のことか、

それとも二人目の男の子さんが生まれた

時のことなのか聞きそびれたけれども、

なんとなく早世した男の子が生まれた時

のこのような気がして聞いていた。御

坂峠への道は、天下茶屋へ続く道だ。天

下茶屋に滞在していた太宰治に会いに行

くために津島さんのお母さんが、バスに

乗って登った道でもある。昭和十三年秋

のことだ。太宰治はここで「富嶽百景」

を書いている。太宰に峠の茶屋を紹介し

たのは井伏鱒二で、津島さんが「井伏さ

んのこと」を話す時には特別な感慨がこ

もっていた。

井伏さんはどうして天下茶屋を知って

いたのかしら？と津島さんに尋ねると

「釣をするから」と即座に答えた。河口湖

を見下ろす天下茶屋は昭和九年の開業だ

そうだから、井伏鱒二が太宰治に天下茶

残っていたのではないかと想像された。

東京育ちの津島さんにとつての故郷はこ

母堂の故郷の甲州なのだ、天下茶屋に

展示された写真を津島さんと一緒に見な

がら納得した。父親を失った家庭では、

母方の実家が「故郷」と意識されること

は珍しくはない。

「火の山―山猿記」をはじめとして最晩

年の「狩りの時代」まで甲州や母方の実

家がモデルではないかと考えられる作品

を幾つも数えることができる。晩御飯の

あとで、下駄をつつかけて寄席へでかけ

ることが出来る都会っ子の津島さんに

とつて甲州はどう見えていたのだろうか。

改めて考えてみると、そこには「憧れ」

の感情が混じっていたのではないかと想

像される。山姥のイメージを根底に据え

て書かれた作品に「山を走る女」がある

が、御伽草子の現代版という創作意図以

前に、甲州への思慕が隠れているのでは

ないかと、ふっと気づいた。津島佑子の

幼年期へのまなざしは山と山が連なる甲

州の方向へと注がれている。

(小説家・法政大学教授)

晩御飯を食べたあとで寄席へ出かけた

と津島さんから聞いた時、あ、やっぱり

津島さんは都会っ子なんだなと感じた。

谷中にある円朝ゆかりの全生庵で「牡丹

灯籠」をやるから聞きたいかかないかと誘

われた時のことだ。津島さんもそういう

子ども時代の古き良き東京の生活を書け

ばおもしろいでしょうというようなこと

を直接に津島さんに言ったのを覚えてい

る。で、津島さんがなんと返事をしたの

かは記憶からすっぽり抜け落ちていたら

ころをみると、たぶん肯定も否定もしな

かったのではないかと推察される。

モンゴル料理を食べにいきませんか

か、東欧の吹奏楽団が来ているから聞き

に行きませんかなど、津島さんが誘って

くださったことはたびたびある。ちよっ

と変わっているけど、おもしろいものを

見つけるのは上手だった。河口湖が見え

る御坂峠へ登ったのは、山梨県立文学館

でシンポジウムを開いたあとのことだ。

まだ暑かったが、御坂峠にはキノコ屋さ

んが店を出していた。菌類の研究をして

いる人はこの御坂峠のキノコ屋さんを必

ず尋ねるのだと教えてもらった。図鑑に

も載っていないようなキノコが出ているこ

とがあるようだ。珍しいキノコはどれも

食用だというので、私はあれも欲しいこ

れも欲しいになった。津島さんは呆れて

「中沢さん、それ一人で食べるの」と聞く

から、うんうんと頷く。「ああ、買物大魔

王が降りて来ちゃった」と笑う津島さん

だった。

御坂峠へ続く道は大きなカーブの続く

企画展

「津島佑子展」

いのちの声をさかのぼる

展示資料より

津島佑子 北杜夫宛書簡

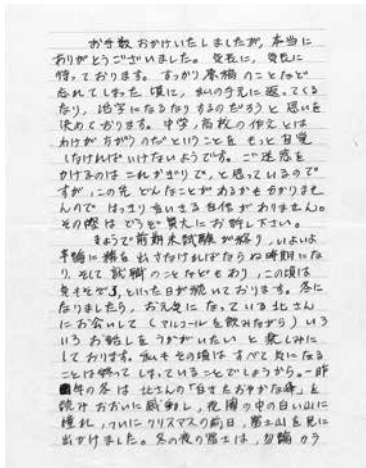
一九六八(昭和四十三)年十月五日消印

個人蔵

白百合女子大学在学中に書かれた北杜夫に宛てた書簡。便箋二枚に青インクのペン書き。

北杜夫(一九二七〜二〇一一)は一九五〇(昭和二十五)年より同人雑誌「文藝首都」に小説を発表。一方、津島佑子は、一九六六年に「文藝首都」の会員となり、翌一九六七年八月に「安芸柚子」のペンネームで「ある誕生」を発表している。

本書簡では、前々年冬に、北の長編小説「白きたおやかな峰」を読み「おおいに感動し、夜闇の中の白い山に憧れ」富士山を見に行ったことを伝えている。



「火の山―山猿記」原稿

当館蔵



「火の山―山猿記」は、一九九六(平成八)年八月から一九九七年八月に十二回にわたって「群像」誌上に連載された。千六百枚以上に及ぶこの原稿は著者の手元に保管されていたもので、入稿はコピーにより行われた。「火の山―山猿記」は、一九九八年六月に上・下巻として講談社より刊行され、谷崎潤一郎賞と野間文芸賞を受賞している。

作品に登場する有森家は、母・美知子の生家である石原家をモデルに描かれて

おり、執筆にあたっては山梨に何度も調査に訪れている。

展示にはほかに、石原家に関わる資料として、祖父・石原初太郎(一八七〇〜一九三一 地質学者)の著書や、祖母・津島修治(筆名・太宰治)と美知子夫婦に宛てた葉書(姉・園子が生まれたときに送ったもの)、美知子の「回想記」(一九九七年八月、人文書院発行「回想の太宰治」収録)の原稿などがある。これらの「火の山―山猿記」創作に際しての参考資料からは、著者が母方のルーツである山梨と深く向きあおうとしていた姿勢がうかがわれる。

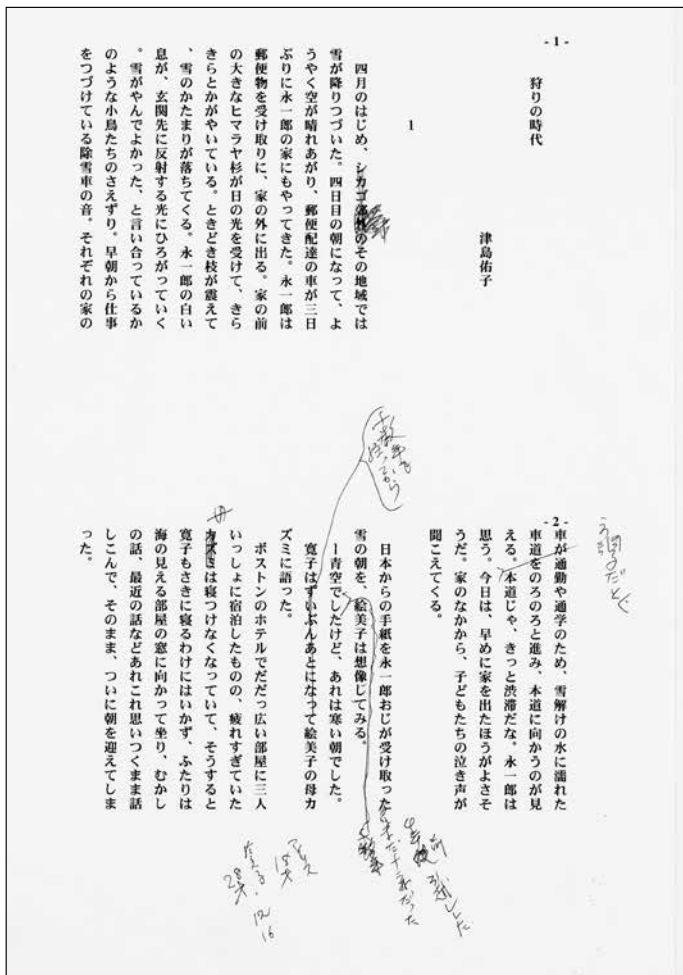
「狩りの時代」ワープロ原稿

個人蔵

二〇一五年の夏前から執筆にとりかかり、翌年五月からの連載を予定していたが作者の逝去により絶筆となった作品。歿後の二〇一六年八月、「狩りの時代(抄)」として「文学界」に一〜四章が掲載された後、同月、全九章が単行本として文藝春秋から刊行された。

このワープロ原稿は、逝去したとき、書斎の机に置かれていたもので、亡くなる直前まで加えられた手書きによる訂正や書き込みを見ることができ。

(学芸課 中野和子)



■追悼 渡邊 弘先生

感謝しつつご冥福を祈ります

加藤 正彦

渡邊弘先生は本年七月十日に愛する家族に看取られながらご逝去なされました。

先生は県立高校の国語教師として多くの若者をおおらかで緻密な見識で陶冶され、甲府西高校校長を経て山梨県教育長に就任、山梨教育のために活躍なされました。平成元年には新設された県立文学館嘱託参与を務めながら、百九十人を擁する文学館協会の初代会長として会員を指導する中で協会の活動の方向付けを明確にして下さいました。その後文学館協議会会長となり、各方面の意見を取り入れて文学館運営の改善を図られると共に、山梨ことぶき勸学院院長として県民の生涯学習の促進にもご尽力なされました。

そんな多忙の中で、先生は「何か書けたら」と思う意欲的な協会員を集めて文章を学ぶ場を設けて下さいました。それがマイヨールの「裸のフロア像」にあやかっつて、ありのままの自分を文章に表現しようとする「フロアラの会」となったわけです。以来多くの会員が渡邊先生の深く真摯な古典文学の造詣や広い

見識の下で定期的に学習会を開き、多様な豊かな人間性を文章に表現することを学びました。

さらに「フロアラの会」では平成四年から、芸術の森公園の石庭に生える稚児笹に因んだ『ちござさ』というエッセイ集を発行するようになりました。その際には会員の作品を優しくも厳しい目で読まれた先生から温かいご指導をいただいたところでした。

『ちござさ』は現在第七集に達し、多くの会員がエッセイを楽しむようになったばかりか、この会を手本にして協力会の中に読書会や呈茶の会、朗読会、抒情歌の会などのサークルが発足し、文学館協会の活動を活発にしております。

暇を閉じますと気さくに私たちに声をかけて下さる先生の笑顔が浮かびます。そんな先生ですから、今後も天から私たちを見守り、導いて下さると存じます。心から先生のご指導に感謝しつつ、先生のご冥福をお祈りいたします。
(文学館協会の会長・山梨文芸協会会長)

*渡邊弘氏は山梨県教育長、山梨県立文学館参与、山梨県立文学館協会の会長、山梨県文学館協議会の会長を歴任。平成二十九年七月十日逝去されました。

閲覧室より

文学資料の収集

この夏の特設展「作家のデビュー展」関連事業として、閲覧室資料紹介「山梨に生まれた作家たち」を行いました。林真理子さん(山梨市生まれ)、保坂和志さん(南巨摩郡富士川町生まれ)、神永学さん(同じく富士川町生まれ)、辻村深月さん(笛吹市生まれ)の現在活躍中の四氏の著書を紹介しました。特設展同様若い方々を中心に多くの皆様にご覧いただきました。

九月)と後期(十月から三月)に分けて、それぞれ六百冊程度を選び出し、入れ替えを行っています。今回の資料紹介でもりあげた作家の作品も通常は一部がここに置かれています。それ以外にも現在では著書を手に入れることが困難な作家、これからの期待される若い作家、県内を拠点に創作をされていた方々など多くの県人の著作が並んでいます。

近年寄贈いただいた図書の中に、笛吹市出身の詩人野澤一の詩と人生をまとめた『森の詩人』(坂脇秀治解説・編 彩流社 二〇一四)と、信州で生まれ山梨で生涯を終えた山田多賀市(たかいち)を追った『安曇野を去った男 ある農民文学者の人生』(三島利徳著 人文書館 二〇一六)がありました。どちらの図書も県外から何度も当館に足を運んで所蔵資料を調査されたり、地元の関係者から話を聞きとるなど、山梨の文学者を地道に調べあげた力作です。知る人ぞ知る文学者の場合、地元にはかない資料と情報が大変貴重であることがわかります。文学館ではこのような研究を支えていけるよう県人の資料を中心に収集・蓄積し、提供していきたいと考えています。ゆかりの作家も含め、著書や関連資料、情報の提供をお願いいたします。

(資料情報課 水上百合子)

教育普及事業より

○文学創作教室 長野まゆみ講演会

「子どものころに好きだった本&なぜ小説家になろうと思ったか」

7月9日(日)に文学創作教室の一環として当館講堂で講演会を開催した。小説家の長野まゆみ氏が、幼少時から親しんだ書物を、エピソードやイラストで紹介した。

また、創作する上でのヒントや小説家になった理由も興味深いものであった。なお、氏は昨年度より、やまなし文学賞小説部門の選考委員をつとめている。



館からのご案内

■教育普及事業

○朗読公演会

「太宰と美沙子」耳で聴く昭和文学」
10月28日(土) 午後2時
演目 太宰治「走れメロス」
林美沙子「清貧の書」

出演 辻輝猛 山谷典子 林次樹
制作 華のん企画
会場 講堂
定員500名 無料

※要申込。電話または当館受付、ホームページにてお申し込みください。

○名作映画鑑賞会

・9月18日(月・祝)「太陽の季節」

・11月20日(月・県民の日)「伊豆の踊子」
いずれも午後1時30分
会場 講堂 定員500名 無料

※申込不要

■展示室

○常設展 展示室A

樋口一葉、芥川龍之介、飯田蛇笏など山梨県出身・ゆかりの作家を紹介する各コーナーの展示替えとともに、第一室で期間限定の資料展示を以下のとおり行います。

・秋の常設展 期間限定公開

夏目漱石生誕一五〇年記念

「漱石―手紙の達人」

8月29日(火)～10月15日(日)

「漱石と芥川龍之介」

10月17日(火)～12月3日(日)

・冬の常設展

「詩人・小林富司夫 生誕100年」

12月5日(火)～平成30年3月11日(日)

○常設展 展示室B

山梨出身・ゆかりの文学者104名を二期に分けて展示。

・10月7日(土)からは、詩・短歌・俳句・川柳・漢詩のジャンルを展示します。第五室は、9月5日(火)～10月6日(金)、11月24日(金)、は休室します。

○新収蔵品展

平成30年1月20日(土)～3月21日(水)平成29年に新たに収蔵された文学資料を展示します。入場無料。

■閲覧室「入場無料」

○閲覧室資料紹介

・「近代文学の挿絵画家たち」

2月10日(土)～4月9日(日)

○文学者の誕生日にちなんだ資料紹介

・「田中冬二」(10月13日生まれ)

10月6日(金)～10月19日(木)

・「深沢七郎」(1月29日生まれ)

1月24日(水)～2月8日(木)

・「奈良枝」(3月15日生まれ)

3月9日(金)～3月25日(日)

○書庫見学

11月20日(月)県民の日

午前11時と午後2時の2回

「寄贈資料より」

(平成二十九年五月～七月)

○松本律子氏より松本鶴雄「民衆性の呪縛・深沢七郎論」原稿。

○小沢龍一氏より一瀬稔「麦の秋」一枚物など三点。

○津島園子氏より津島美知子「父のこと・兄のこと」原稿など四六六、図書三点。

○岡井隆氏より「暮れてゆくバッハ」草稿など四点。

○滑志田隆氏より尾崎一雄「木枯」草稿。

○武井力氏より香川香南筆漢詩屏風など二点。

次の皆様からも図書・雑誌をご寄贈いただきました。(敬称略)

| | |
|--------|-------|
| 秋山 佐和子 | 田下 啓子 |
| 秋山 亮二 | 鷹羽 狩行 |
| 飯野 正仁 | 鄭 炳説 |
| 石原 廣義 | 中込 鮎 |
| 一瀬 公弘 | 中田 水光 |
| 海老原 義憲 | 中村 章彦 |
| 大森 一彦 | 秦 恒平 |
| 鬼丸 智彦 | 平野 千里 |
| 香川 雅子 | 平松 伴子 |
| 笠見 孝子 | 備仲 臣道 |
| 衣川 いつ美 | 不二牧 駿 |
| 壽 真琴 | 古屋 久昭 |
| 三枝 浩樹 | 三井 記子 |
| 杉山 武子 | 槍田 良枝 |
| 砂田 貢 | |

この他に団体の方々からも寄贈いただいております。

資料翻刻

当館が所蔵する鈴木孝宛の松村英一書簡三通を翻刻する。

松村英一(一八八九〜一九八一)は、東京生まれの歌人。一九一四(大正三)年六月、窪田空穂主宰のもとに文芸雑誌「国民文学」を創刊、後に空穂から同誌を引き継ぎ主宰する。歌集に『やますげ』(一九二四年四月、紅玉堂書店)、『初霜』(一九三四年十一月、改造社『新選代表短歌叢書』第三編)などがある。

鈴木孝(一八九七〜一九八〇)は、山梨県笛吹市生まれの歌人。一九二八(昭和三)年に「国民文学」に入会、松村英一に師事、一九四一年に「国民文学」第二同人となり、一九四八年に第一同人となる。翌年十二月には第一歌集『寒燈』(国民文学社)を刊行。一九五四年七月、許山茂隆らとともに歌誌「樹海」を創刊・主宰。同誌には、「沃野」「まひる野」など、窪田空穂系の歌誌の同人が多く参加した。著書に『丘のある街』(一九六六年十月、甲陽書房)、『現代短歌 批評と感想』(一九八七年八月、樹海社)などがある。

松村英一 鈴木孝宛書簡(封書)

一九四二(昭和十七)年二月十三日

許山君危険区域を脱出されたことは洵に大慶に存じます。どうかと思つてゐましたが安心の出来る様子なので、帰途の御見舞は遠慮しました。快方に赴かれたら、余り無理をしない方法で、新しい

生活設定をなさるやう御注意願ひます。何と言つても過労が一番いけないのですから、その点を御慎重に御考へ下さることが必要です。

貴君の御病氣も御帰宅出来るまでになればもう大丈夫でせう。尚余寒がつゞきますからこれ又御養生専一に願ひます。

さて記念会は大変盛会で御骨折の甲斐があつたといふものです。今日は時代が時代故、さう利己的に振舞ふものはあるまいと思ひますが、運用はまた別の手腕が要りますから十分御考への上この上にも強手なものになるやう一層の御努力を願つておきます。

それから御申出の講演原稿ですがこれはありません。あるのは引例した歌の資料だけです。あの話は原稿をつくる暇がなく、当日壇上で話をしながらまとめて行つたもので、若し作つて頂くとしたら印象を辿つて書いて頂く外ありません。小生手が隙いて居れば何とかしますが、今のところ書くことが出来ませんから、そちらでまとめて頂いたのを拝見して訂正するといふことにしたいと思います。資料は必要なら御送りします。

話の要領は、古事記、万葉の農村関係の歌から始まり、中世から徳川時代に及んで真淵と曙覧の作に特色があつたこと、明治になつて取材的に拡充したのは、作家に農村から出た人があつた為で、そこに史的に見て進展のあとがあること。尚、事変を背景としての農村に、農は国の大本であるといふ自尊と自覚の生じたことが特筆すべきことであるといふのです。これを筋として挿話的に農事に関することを話したのであつて、印象としてはその方が最も力強く残つてゐるかも知れません。

御記憶にある点だけでも一度御書き下されれば幸ひと思ひます。尤もその中これは百枚位にまとめて論文にしたいと思つてゐます。

二月十三日

松村英一

鈴木 孝様

〈受〉山梨県東山梨郡加納岩町 鈴木孝様

〈発〉東京西大久保三一二八 松村英一

〈翻刻者註〉縦二十三・四センチ、横十六センチの灰色野線入り便箋四枚に黒インク使用。四銭切手一枚貼付。「□□17・2・14」の消印。

「許山君」は、山梨県笛吹市生まれの歌人・許山茂隆(一八九〇〜一九七八)。鈴木孝の従兄にあたり、鈴木より一年早く「国民文学」の第二同人となつて甲府における「国民文学」の歌人たちの中心となつていた。この年二月、胃かいようで吐血入院している。「記念会」の内容については未詳。松村がこの年刊行した『田園短歌読本』(一九四二年七月、海南書房)中の「田園短歌の概観」に關連するが。

松村英一 鈴木孝宛書簡(封書)

一九六六(昭和四十二)年六月二十七日

啓、おたずねの『向う』は、文法的には清水君のいう通りだと思ひます。古歌集では何れも『向ふ』で、『向う』はありません。然し、明治以降、特に近代になつてからは、位置などという場合、『向う』と書くようになりました。根拠を求めるならば、『向ひ』の音便ということになりました。小生なども、目的に依つて両用しています。その別は、

自己の動作が加わった場合は、『向ふ』を使います。たとえば『山に向ふ』『東京に向ふ』などです。だが、位置を指す場合は『向う』を用います。『向うに山がある』『向うに花が咲いている』『向うへ鳥が飛ぶ』などがそれです。この用法は現在一般化していきましょう。そして文法的に誤りだとは言いません。目的の用途を明確にして差別すれば、異なった、違法とは思いません。但し旧来のやり方で、位置をいう際『向ふ』を使っても誤りとは言えますまい。その点知っておかねばなりません。用途によって両用すれば、意図も明確に受取られましよう。貴作もその意味で一向差支えないと思えます。

六月廿七日

草々

松村英一

鈴木孝様

〈受〉山梨市上神内川 樹海社 鈴木孝様

〈発〉六月二十七日 東京都新宿区西大久保三一

一二八 国民文学社 松村英一

〈翻刻者註〉縦二十四・八センチ、横十七・六センチの灰色罫線入り便箋三枚にブルーブラックインク使用。十円切手一枚貼付。「新宿41. 6. 27」の消印。国民文学社の住所・社名は印。

ある方向や場所を目指して進む意の動詞として使う場合は歴史的仮名遣いの「向ふ」、位置などを指す場合は現代仮名遣いの「向う」というように、仮名遣いの使い分けについて述べる。

松村英一 鈴木孝宛書簡(封書)

一九六八(昭和四十三)年十月二十一日

歌碑が建つ由、おめでたく存じます。私は自分の建てる気持はありませんが、人の拒む気持はありません。殊に君のは郷土の人々の好意に依るのだから結構だと思えます。

建碑除幕に出席のことは、まだ先の永いこと故何とも言えませんが、身体の調子さえ良ければ御祝いに出席ことにしましょう。近来益々足の痛みが強くなり、殆んどが門外不出の形です。それでも先月は乗鞍に行つて来ました。飛驒の高山はバスで通過しましたが、来秋あたり、そこを中心としての旅をして見たいものだと思います。

送ガナのこととは私も気にして何とか統一したいと思つていますが、諸君が現代式でやっているのと思うようになりません。名詞の場合は不必要にもかかわらずそれにさえ送っています。一つは古くからの慣用に従っている人もあるのでしょう。たとえば「流れ」「曇り」「明り」「笑ひ」など一例ですが、正格に言えなければ本当ですが、慣用として認めれば許せるかも知れません。空穂先生の歌にも少数だがこれに類した使用例が見られます。然し私は人は人と思つて、歌の場合は慣用的な送ガナを排しています。歌は文語表現だから矢張り歴史的に使用すべきだと考えているからです。但し文章の場合は、時には慣用に従います。「確かに」「味い」「生まれ」「関わらず」などがそれです。これらは名詞以外のものも混つていますが、現在では普通となっているからです。然し、規定され

ているからと言って「落とす」というような使用はしたくありません。名詞と動詞の場合は一様に行かない面もありますが、出来るだけ古来の文法に従うのがよいのでありますまいか。私の文章は新カナの法則を守つてはいるが、カナ使いは以前のままだということになりましよう。何れ余裕があつたらこれらに就いても書いて見たいと思つています。

松村英一

十月廿一日

鈴木孝様

〈受〉山梨市上神内川一二四一 樹海社 鈴木孝様

〈発〉十月二十一日 東京都新宿区西大久保三一
一二八 国民文学社 松村英一

〈翻刻者註〉縦二十四・九センチ、横十七・七センチの灰色罫線入り便箋四枚にブルーブラックインク使用。十五円切手一枚貼付。「新宿43. 10. 21」の消印。国民文学社の住所・社名は印。

一九六九(昭和四十四)年四月十三日、山梨県山梨市万力林の一角に、鈴木孝の歌碑「丘の上のかれ桑原に鳴る風のいく日吹きなば春や来向ふ」の除幕式が行われた。式には、鈴木夫妻のほか、許山茂隆、「樹海」同人ら約二百八十名が参加。歌碑はその後、笛吹川フルーツ公園に向かう富士塚通り付近に移された。

松村は、歌人の中では登山家として知られ、乗鞍岳には一九六八年と一九六九年の両年に登山している。

(翻刻者 学芸課 伊藤夏穂)

館 の 日 誌

- 6・9(金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
「太宰治」(~6・22)
- 6・10(土) 名作映画鑑賞会「青葉城の鬼」
書庫見学
- 6・11(日) 第二回読書会
- 6・15(木) 浅川中学校出前授業(魅力的な短歌の作り方)
- 6・17(土) 文学創作教室「初心者短歌教室」第3回
講師 三枝浩樹(歌人)
- 6・24(土) 年間文学講座 I「石のいわれ—勝沼萬福寺の等々
力石(馬蹄石)と怪異石」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 6・30(金) 閲覧室 文学者の誕生日にちなんだ資料紹介
「飯田龍太」(~7・13)
- 7・2(日) 夏休みワークショップ「デコパージュで『赤毛の安
ん』を身近に」
講師 小林睦実(美術講師)
- 7・9(日) 文学創作教室 長野まゆみ講演会
「子どものころ好きだった本&どうして小説家にな
らうと思ったか」講師:長野まゆみ(小説家)
第三回読書会
- 7・13(木) 年間文学講座 II「あまんきみこ 自己犠牲の童話
—「おにたのぼうし」「きつねのおきやくさま」
講師 牛山恵(都留文科大学名誉教授)
- 7・15(土) 特設展「作家のデビュー展」(~8・27)
閲覧室資料紹介「山梨に生まれた作家たち」(~8・27)
年間文学講座 I「饅頭の礼—伝説中の勝頼像」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 7・17(月・祝) 夏休み自由研究プロジェクト参加(親子ねこペ
ン立てを作ろう)
茶室「素心菴」にて呈茶
- 7・19(水) 夏の常設展 期間限定公開
夏目漱石生誕150年記念 山梨県立美術館出品協
力第二弾「漱石と橋口五葉」(~8・27)
- 7・25(火) 総合教育センター外部共催研修「文学館の魅力活
用~能と文学」
夏休みワークショップ「能の世界を体験しよう」
講師 佐久間二郎(観世流能楽師)
- 7・27(木) 教師のための学習会
- 7・29(土) 名作映画鑑賞会「チリンの鈴」
- 7・30(日) 辻村深月講演会「フィクションの向こう側」
講師 辻村深月(小説家)
聞き手 三枝昂之(当館館長)
- 8・2(水) ジュニアインターンシップ受け入れ(~8・6)
- 8・3(木) 年間文学講座 III「太宰治 デビューの頃」
講師 伊藤夏徳(当館学芸員)
- 8・5(土) 夏休み子どもワークショップ「レザークラフトで
プレスレットを作ろう」
講師 近藤和郎(レザークラフト工房フロンティア)
- 8・6(日) 名作映画鑑賞会「火垂るの墓」
第四回読書会
- 8・10(木) 年間文学講座 II「今西祐行 戦争の時代に生まれ
たヒューマニズムの文学—「一つの花」・「ヒロシマ
のうた」
講師 牛山恵(都留文科大学名誉教授)
- 8・12(土) 年間文学講座 I「鍼医の言い分—甘利村不動の託宣」
講師 長谷川千秋(山梨大学教授)
- 8・29(火) 秋の常設展 期間限定公開
夏目漱石生誕150年記念 「漱石—手紙の達人」(~
10・15)
- 9・7(木) 年間文学講座 III「参加者みんなで『走れメロス』を
読む~参加型講座」
講師 笠井里香(当館教育主事)
- 9・9(土) 文学創作教室
講師:三枝昂之(当館館長)

利用のご案内

■開館時間

○展示室 9:00~17:00 (入室は16:30まで)

■利用のご案内

○閲覧室・研究室 9:00~19:00 (土・日・祝日は18:00まで)

○講堂・研修室 9:00~21:00

○茶室 9:00~21:00 (準備・片付けの時間も含まれます)

○ミュージアムショップ 9:30~16:20

■常設展観覧料

| | 常設展 | | | 企画展 | | 常設展と 企画展の セット券 |
|-----|------|---------------|--------------|------|------|----------------------|
| | 個人 | 団体 (20名以上) | 美術館との 共通券 | 個人 | 団体 | |
| 一般 | 320円 | 250円 | 670円 | 600円 | 480円 | 730円 |
| 大学生 | 210円 | 170円 | 340円 | 400円 | 320円 | 490円 |

※65歳以上の方(企画展は県内在住者のみ)、障害者手帳をご持参の方及びその介護をされる方、高校生以下の児童・生徒の観覧料は無料です。

11月20日(月)県民の日は文学館・美術館のすべての展示が無料です。

■施設利用のお申し込みについて

○講堂・研修室・研究室・茶室の申込みは、使用しようとする日の6ヶ月前から原則として10日前までです。

☆いずれも休館日は受け付けません。使用上の注意は申込みの際、ご説明いたします。

■休館日(9月~3月)

○9月4・11・19・25日

○10月2・10・16・23・30日

○11月6・13・27日

○12月4・11・18日

○1月22・29日

○2月5・13・19・26日

○3月5・12・19・22・26日

○年末年始は、12月25日(月)~1月1日(月)まで休館します。また、1月9日(火)~1月16日(火)は館内整備のため休館します。

山梨県立文学館 館報 第103号

平成29年9月10日発行

編集兼
発行人 三枝昂之

発行所 山梨県立文学館

〒400-0065

山梨県甲府市貢川一丁目5-35

☎055(235)8080 FAX 055(226)9032

<http://www.bungakukan.pref.yamanashi.jp/>

※紙面の無断転載はお断りします。